

日^そ
照^ば
雨^え

立ち読み用
本文 22 ページまで

成人向け作品のため、18 歳未満の閲覧禁止。

本編は 2009 年より web サイト公開済の作品です。

少々に加筆修正以外、内容に大きな変更はありません。

ご了承ください。

登場人物

逸……貧しい武家に生まれ育った少女
水城新兵衛……二百石の藩士、逸を雇う
松尾小四郎……水城家の用人
和子……松尾の妻
いね……水城家の下働き
留吉……水城家の下男、いねの夫
藤崎鎮目……藩の筆頭家老（執政）
藤崎吉太郎……鎮目の嫡男
鳥越宗右衛門……藩の大目付
仙之介……藩主の次男、母は鎮目の娘
加恵……仙之介の側女
欣之介……藩主の三男、母は正室
千賀子夫人……藩主の正室
畑野辰之助……逸の父
幸枝……逸の母
月子、志郎、睦郎……逸の姉、兄、弟

※この物語は、フィクションです

日そ
照ば
雨え

目次

第一章	六
第二章	四六
第三章	九二
第四章	一四九
第五章	二三三
第六章	三〇四
終章	三四四

第一章

一

逸、いつと読む。

日ごろは逸と呼ばれるその娘は、逸子というのが本当の名前だった。

初雪のちらつく城下の街に逸がやってきたのは、さる侍の屋敷に下働きとして奉公するためだ。

彼女を連れていているのは、その侍の家で門番兼下男をしている留吉と言う老人で、老人は逸を気遣わしげにときどき振り返る。風に吹かれて、逸の頬に髪が掛かる。髪は、顎より短かった。髷が結える長さでは到底ない。

髪は、父に切られて売られたのだと言う。

逸の母の幸枝は病床について長い。父親の畑野辰之助も決して丈夫な体ではない。

逸は、五番目の子であった。禄の低い軽輩の家でその状況はそれこそ娘を売りに出さねばならぬ貧しさだ。

逸の前には四人の子と、下には二人の弟妹があった。上から女、女、男、男、そして逸、弟、妹という順である。一番上の娘は早世、二番めの娘は先年ほぼ同輩の家に強く望まれて嫁ぎ、次に生まれた長男と、一番下の妹は昨年の冬に病で亡くなった。

逸の父は、山深い土地の代官屋敷に勤め十二俵をもらう輕輩である。だから逸もその山深い里で生まれて育った。藩の經濟も苦しいらしく、扶持米も滞り、その上に借り上げられ、生活はかつかつであつた。そしてこすからい代官がさらに年貢をくすねた財で下のものに高利で金を貸してさらに搾り取るようなまねをしている。

その土地の事実上の支配者である代官は、現在の執政である老職の藤崎一族の者だつた。そういう代官の行状をむしろ奨励しているような上層部の者どもには、逸の父親はどうの昔から絶望している。藩で奨励されている漆などの換金できる作物の買取の値段も年々下がり、藩士の家族達がつむぐ生糸や織り上げる紬の布なども、その引取値は謂われなく下落を続けている。

それがおよそ二十年続いている。

實際にそれが商品として売られるときの差額がどのくらいになるのかは、それを扱う商人と、彼らと結託している者以外は、全く知らないことだ。

寝る間を惜しんで働き続けても、貧者はますます飢え、凍えている。

母の医薬の代価のために、逸の家でも借財がかさんでいる。

逸の家と同輩の家では、借財のかさんだ家の妻や娘が代官の口利きで密かに城下へ出て体売っており、その上がりを代官が利息として取っているという。そのことを逸も十四歳になるころには少女の身ながら聞き知っていた。

いずれ自分も城下へ行かなければならないのだろうと覚悟をしているうちに、年月が過ぎた。

晩秋の頃、その覚悟を他家へ嫁いだ姉に話し、そのことは父にも伝わったらしい。そして父は、利息の支払日が近くなったある日、逸の髪を切り落とし、それを持って城下のかもじ屋に売りに行った。ついでに知人を通じて逸の奉公先を決めたらしい。

利息を受け取りに来た代官の使いが、その日に限り「逸はどう育ったか」と言い、彼女を見たがった。城下に出すために品定めをしようというのはありありとわかる。

父は、顎より短く切り取られた大童^{おおわらわ}の髪を嘆く逸を呼び、その哀れな姿を使いの者に見せた。

「髪を売りましたので、このように見苦しき姿と相成り申した」

と、彼は軽蔑をこめた眼差しで使いの者を見、さらに言い放った。

「逸はこのたび二百石の御使番、水城新兵衛様のお屋敷に奉公することに相成りました。支度金も頂戴しており、そのほうでは懸念は少なくなり申したな」

水城新兵衛が逸を見て、その斬髪はやはり奇異だと感じた。彼の傍らで共に挨拶を受けている用人の松尾小四郎も同じ感想を持っただろう。

今まで下働きとして働いていた下男の留吉の孫娘が嫁ぐことになったため、新兵衛の知人を通じて雇い入れることに決めたのが逸である。良く働いてくれるなら別に見た目を問うつもりは無かったが、それでも項にすら掛からぬ長さの髪は、新兵衛の眼には怪訝に映っていた。

「逸と申します」

よろしくお使いください、という挨拶の声にも、表情にも、まもなく十六歳だと話に聞いていた年齢相応の弾みが無い。乾いていて、硬い。

か細い顎や首、薄い肩など見ればその年齢よりも幼いようだが、強く引き結ばれた唇と、新兵衛に焦点を合わせて揺ぎ無い視線には聡明で大人びた静けさが漂う。

やつれて顔色は悪いが、下働きの小娘としては、意外なほど端整な顔立ちであった。すこし悲しげな眉の線の下に切れ長の眼があり、睫毛が過分なほど生えていて、水を張ったような艶を帯びた黒目がちの眼差しを彩っている。水を含むようにふくらした唇は小さく尖っているが、そのかわいらしさとは裏腹に、無駄に開かぬ意思をもって唇は硬く閉じられていた。

あるいは武家の生まれか、と新兵衛は察した。下働きの雇われるような立場だとすれば、親は長く禄を離れた浪人か。詮索しないほうが、先方のためでもある。問わないことにした。

ただ、聡明であれば働きにも幅が出る。それは新兵衛や他にここで働く者達にとってもよいことではあるだろう。おおむね歓迎すべき使用人として、彼は逸を見た。

それにしても身なりはひどい。髪が短いこともそうだが、着ている物もいったい誰のために仕立てられたものか。かつては何かの色だったのかもしれないが、汚れ、洗いを繰り返しているうちに薄ぼんやりとした灰色のようなものになっていた。そして肩や袖には一向に色合いの合わないような褪せた柿色の継ぎが当たっている。とはいえ不潔ではない。ただ哀れみを憶えるようなみすぼらしさ

ではあった。

新兵衛は、過分に与えた三両という支度金を思い出している。

その支度金は、どうやら逸の身支度のためではなく、彼女の家族のために使われてしまったらしい。ほんの少しくらいは、街に出る娘のために使って、古着でも買ってやればよいのに、と見も知らぬ逸の親に対して小さな憤りを覚えた。

藩の不況の折、二百石をもらう水城家も禄を借り上げられているが、困窮はしていない。かといって豊かでもないが、金があった。

亡くなった妻のおかげである。この春に三回忌を済ませた。妻は事故で亡くなった、と新兵衛は聞いている。藩主の次男が馬で撥ねたという。そのとき跡継ぎが同道していたという主席家老の藤崎からも見舞金 came。それが合計で三百両。それゆえに金があった。

異様に高額な見舞金は、何か裏を感じるが、詮索してはならぬという口止め料の意味もあるのだらう。

新兵衛は妻の死後すぐより無役であるが、病ゆえの出仕の遠慮ということになっている。役料さえもそのまま支給されている。

役を退けられたことも、無役ながら収入がそのままのこと、家老の計らいであることは読めている。

新兵衛に、他人と立ち混じられたくない事情があるというわけだろう。

貯えがあり、収入があり、そして仕事がないということは、勢い、新兵衛から外出の必要性を奪っていた。彼はまるで隠居か蟄居をしているようにほとんど家から出ない。水城家では役もないために供周りを養う要もないということで、この生活になつて直ぐに、不要の人員を屋敷から去らせた。

水城新兵衛は三十二歳になる。妻は、亡くなったとき二十四歳だった。連れ添つて五年目で、子供は無かった。親は新兵衛が妻を娶つて三年のうちに相次いで亡くなつており、弟や姉妹は既に養子縁組みや婚姻で他家に出た。

今の水城家は、当主の新兵衛のほか、長屋に住む用人の松尾小四郎とその妻で病に伏せている和子、門番兼下男の留吉老人とその妻の老婢いね、そしてこのたび雇い入れた逸、だけが住んでいることになる。

逸が働き出して二十日目。新兵衛は老婢のいねに金を渡し、逸の為に古着を購つてくるように命じた。

「旦那様からお渡しになればええのに。さぞ喜びましょうが」

腰が曲がつていつそう小さくなつたいねが、丈高い新兵衛を見上げて言う。

「逸は、ほんによう働く子じゃからな」

「いや、この間は本人に遣つたんだが、どうもそのまま親元へ届けてしまったらしい」

新兵衛が困惑顔に言うと、いねは深いため息をついていた。

「孝行な娘じゃなあ。ほんに」

孫に爪の垢を煎じて遣らねばなるまい、いねは軽口を叩いて笑いながら、新兵衛から金を受け取って請合った。

「天気がもっているうちに、行って来てくれ。ついでに温かな汁粉でも食べておいで」

「ははは。旦那様、汁粉ならわしがこさえたほうが旨いよう」

陽気に言葉を返すいねを見送ってから、新兵衛は日課になっている薪割りをするために屋敷の裏に回った。

薪割りは身体の鈍りがちな隠居生活にはもってこいの運動である。

屋敷の裏の日陰には、先日うつすらと積もった雪がまだ残っていた。もう少し経てば地面が見えなくなるほどに雪がつもるだろう。

新兵衛の薪割りも堂に入ったものだ。手際よく置いた薪を、ばかりと一発で真つ二つに割ることが出来るようになった。白い息を吐きながら数本の薪を割るうちに、体から湯氣を立てるほど、汗をかいていた。

霜柱が高々と地表を押し上げている。その上を、逸はさくさくと音を立てて歩いた。空の桶を持って、どこか足取りが軽い。

下駄の上の素足は、つま先が赤い。身につけているのは昨日までの薄ぼけた灰色の物ではなく、明るい芥子色の袴であった。芥子色に細い線で海老茶の格子柄が織り込まれている。逸の頬にも明るい色が差す。

夜明け前の世界が、急に彩りを帯びたように、逸には思っていた。

昨夜、いねは逸に着物を二枚与えてくれた。今朝着ている芥子色のものと、藍の緋の着物だった。どちらも古着ではあったが、藍のもののほうが傷みが少なく、それは少し良いときに着るといい、といねの助言どおり芥子色のものを普段に使うことにした。

正月には藍のものを着よう、と逸は弾むように考えた。

からころと井戸のつるべを手繰り、水を汲む。台所の水甕を満たすように、三度、井戸と台所を往復した。二枚菌の下駄の跡が、六列。茶色の土の下に、白い霜柱が倒れて見えた。この屋敷に勤め始めてから直ぐに下駄を与えられた。草履と違って霜を踏んでも冷気が染みてこないことにありがたみを感じる。

父や母はどうしているだろう、とその霜柱を見ながら、逸は少し足を止めた。急に手元の桶が重たく感じられた。はあ、とついたため息が白い。少しだけ、新しい着物にときめいた自分を恥じた。

桶になみなみと汲んだ水を持って台所へ行くと、新兵衛がそこに居た。柄杓で甕から水を掬って飲んでゐる。少し、酒精の匂いが彼の体から漂っていた。寝間着の上から納戸色の袴を引っ掛けてゐるだけの、少々だらしない格好だ。

「おはようございます、旦那様」

居ぎたない様子の新兵衛に対しても、手に桶を持ったままの逸は深々と頭を下げる。

「ああ、逸か。早いな」

「はい、あのう、」

着物の礼を述べようとする逸の手元から、新兵衛は軽く桶を取り上げ、水甕にぎっと注いだ。

「ありがとうございます、旦那様」

大柄な新兵衛の傍らで、逸は首を反らすように彼を見上げている。

新兵衛は、桶の水を甕に入れてやったことに對しての礼かと思つた。逸の姿を見て、「ああ」と悟る。

朝の光が斜めに弱く射す中に、真夏の日差しのように鮮やかな色彩を帯びて逸が立っていた。光を浴びた肌の血色も良く見え、先日までの打ち沈んで乾いた様子が薄らぎ、かわいらしかった。

「良かった。なかなか良い」

新兵衛は少し微笑んで言つた。逸くらい年の頃の若い娘が、明るい色の物で装っている姿を見るのは、新兵衛のみならず誰が見ても実に快いものだ。

「ありがとうございます」

笑顔の新兵衛を見上げた逸の声に、少しだが潤いが宿っていた。

逸の目から見るに、新兵衛は不思議な男だった。

働き盛りの年齢で、身体の健康にも頭脳にもなんら不都合はない。むしろ人並み以上にその辺りは優れているようだ。にもかかわらず隠居のようにほとんど家から出ることなく暮らしている。何かの罰で出仕の遠慮を申し付けられているわけでもないらしい。

夜に外出することもあり、まれに、今朝のように翌朝に酒気を残していることもある。

それでいて彼の立ち居振る舞いに怠惰な弛みはない。

屋敷の一室を道場のように改築しており、毎日そこで槍を使い、剣を振り、小太刀を鍛錬している。身体を鍛えることには熱心である。

朝、逸はまず新兵衛の食事を給仕し、そののちに朝食を摂る。それから用人の松尾の妻の病床の世話をする。その後洗濯や掃除をする。庭の掃除は下男の留吉の仕事で、台所は炊事を含めていねの持ち場であるから、逸が掃除を担当するのは、主人である新兵衛の居室や玄関などの部分である。それらの仕事がそれほどの重労働とは逸は思っていない。

逸がそういった仕事をしている昼間、たいてい新兵衛は道場で身体を動かし、ときに書物を読んでいる。

彼は、鍛錬の前に道場の神棚を清め、ひとしきり剣や槍を振ったあとに、必ず自ら道場の床はも

ちろん、柱までも拭き清めていた。それゆえに逸は道場には足を踏み入れたことがない。立ち入れぬ気配が道場にはあった。

ある日、逸は新兵衛が道場で木剣で型を使っている姿を初めて近くで見た。

呼吸とともに鋭い刃風で振るわれる剣は、凜然として其処にある気配を断ち切っているようだった。ぶれない姿勢と、流れるような停滞のない動作が、逸にはとても美しいものに加え、見惚れた。道場の外の廊下を拭いていた手を止め、半間ほど開かれた戸口に膝を付いたまま、舞うように動作を続ける新兵衛を見上げる。道場の窓からは、弱い冬の日が射していた。

寒い季節のことである。逸はくしゃみをした。新兵衛の静かで厳しい動作を遮るまいと、慌てて顔を背けて袂で顔を覆って、抑えに抑えたが、無駄であった。逸がくしゃみをした瞬間に、新兵衛の研ぎ澄まされた気配が、ふと、緩み、彼は至極おだやかな表情で逸の方へ視線を向けた。

「お邪魔をして、申し訳ございません」

逸は、身を縮めて膝の前に手を付いて頭を深々と下げる。新兵衛の精神の静謐を遮ったことがひどく悲しく、そうしてしまった自身がひどく腹立たしい。

逸の、短く切り下げられた髪が、彼女の華奢な顎先で小刻みに震えている。逸が、彼に叱られることへの怯えから震えているのか、ただ寒さに震えているのか、新兵衛には、判然としない。ただひどく恐縮しきっている逸に憐れみを感じた。

「何も謝ることはない。逸は何も私の邪魔などしてはいないよ。ここは寒い。暖かくしておきなさい」

「はい。お気遣いくださってありがとうございます」

安堵の表情で逸が顔を上げた。

薄暗い廊下にいる彼女の顔に、道場の窓からの光がほのかに当たっている。頬の血が透けて、長い睫毛に彩られた黒目がちの大きな眼が水を帯びたようだった。新兵衛の胸を騒がすほどに、少女にしては眼差しが大人びている。

「何か、面白かったかね？」

その眼で、しばしの間、見つめられていたことに気づいた新兵衛は、つと眼を逸らしながら訊いた。含羞で胃の腑が上がる。

「静謐で、美しく思えました」

「静謐……」

逸の感想の内容より、そんな語彙が、廊下を掃除している少女の唇から発せられたことに新兵衛は驚いた。

「逸は読み書きは得意か？」

「その、真似事程度には、可能です」

「学ぶ、とは、真似ぶ、ということからきているらしい。真似事で出来れば十分だ」

急に彼が何を言い出したのか、逸はいぶかしげな表情を浮かべていた。

「書物の整理をしたいとかねがね思っていた。文字に明るければ、手助けになろう」

「承知いたしました」

「寺子屋に行っていたのか？」

「いえ。両親から学びました」

返事を聞いて、新兵衛は、やはり逸は武家育ちだろうと察した。だが、それ以上の身の上話には立ち入るまいと、話を切った。

逸は、普段の仕事で新兵衛の居室の掃除をしているから、彼がよく読書をしていることを知っていた。文机がある居室の床の間にも、寢室の片隅にも、よく書物が積みあがっているからだ。

昼餉の給仕の時に、新兵衛から、

「昼の後、居間へ来るように」

と申し付けられ、逸は、急いで昼食を終えて新兵衛の居間へ行った。

これまで立ち入りを禁じられていた、居間の奥、その障子を出てぐると回ったところに、納戸があった。広さは六畳ほどだろうか。長持や箆筒もある。季節外の着物なども収められている。その部屋の真ん中に、書物が六つほどの山に積み上げられていた。

火の気がなく、寒い。そして埃がひどかった。まずは掃除からだろうと逸は思った。

その仕事を新兵衛に委託されてから、十日ほど後。よく晴れた日に、逸は、いねや留吉たちも暮らしている長屋門の脇の部屋から、母屋の台所脇の小部屋に引越した。

これから雪も深くなる。逸は母屋での作業のほうが多いから、そのほうが便利ではないかといねと留吉からの提案であった。用人の松尾も賛成した。逸にも否やを考えるまでもなかった。そのほうが良い。

引越しを終えた午後、いつものように新兵衛の居間へ行き、障子の前に膝を付き、

「逸でございます」

と声をかけた。

「ああ、開けて構わぬ」

「失礼します」

す、と障子を開け、頭を下げてから顔を上げる。

新兵衛は、立っていた。袴を着け、羽織を着ている。顔を上げた逸が見たのは、その姿でなにやら書付を懷に仕舞っている仕草だった。

「すまぬ。いつものように、いろは順に仕舞っておいてくれ」

文机の上はとり散らかっていた。

新兵衛が外出するのを、逸は初めて目撃したわけではない。ただこのときは少しばかり忙しな思いだった。

日暮れの前には、新兵衛は帰ってきた。懷に、また新しい書物を持っていた。

彼の蔵書は、朱子学についての解題、古典の歌集の写本やそれに類するものの解題、そして兵法書、くだけたところでは紀行文や黄表紙など読本も含まれていた。書物は決して安価なものではない。やはり裕福なのであろう。自ら筆写したものもあるようだ。

多くの書物の中に、栞や付箋がある。読み込んでいるのだろうと逸は思った。

本屋には、水城家はいい得意先である。

月に二度は、貸し本屋が長屋門に現れ、新兵衛はその本屋を庭先に通して置くようにという。売るほうの本屋も同様に現れる。縁の上に書物を広げ、本屋と語らう姿を、逸は遠くからよく見かけていた。

間近に居るときは、たとえば新兵衛の在室中に居間の片付けなどをするときは、あまり彼を見ることは慎むが、少し距離を隔てると、つい、逸は新兵衛を目で追うことが習慣になっていた。

あまり近づいてはいけなさと意識しているが、新兵衛の鍛錬の時の姿を見るのが、逸は好きだった。息も白くなるような朝に、体から湯気を立てるほどに新兵衛は木刀を振っている。首筋や、はだけた胸元には汗が光っていた。

邪魔にならないように、と慎もうとはしている。新兵衛の張り詰めた領域を侵すつもりはない。それでもどうしてもその新兵衛の姿を見ていたいと、強く思う日があるのは、逸本人にとっても困惑の

種である。

新兵衛は、逸からはあごを上げて見上げるほどに背が高く、肩幅も広い。無駄な緩みのない引き締まった頬と、真っ直ぐに通った鼻筋、外側に跳ね上がる濃い眉を持ち、切れ長の目は細いが涼しい光を持っている。目がもう少し大きくなり、唇の厚みを少し削れば、美男の部類に加えても良いだろう。均整の取れた容貌ではあった。

水城家が裕福だからこそのことだろうが、新兵衛のような鷹揚さは、郷里の誰も持っていないものだった。

穏やかに語り、ゆったりと書物を読み、それでいて体を鍛えるときには峻厳に筋骨を躍動させる。言葉は少ないが気さくで、逸が重たいものを持っているとすぐに手を貸してくれ、もったいないことを、と恐縮すると少し含羞む。そういうときの新兵衛の表情を見上げると、逸は胸の奥に熾き火を抱いたようなぬくもりを覚えるのだ。

それと同時に、二年ほど前に亡くなったという奥方の位牌の前で手を合わせている新兵衛を見るときは、えもいわれぬ冷たい陰りが逸の胸に兆す。

とにかく新兵衛とは、かつて見たことがない種類の男だった。

三

正月の賑々しさを忘れた頃の、雪のちらほら降る日。

逸は日常どおりに冷たい水で雑巾を絞って廊下を拭いていた。

幾度となく手を止めて指に白い息を吹きかけても、あまり温かくならない。しかし、それを苦には思っていない。この前の冬は、その冷たい手を温めるための火を熾す薪や炭も乏しく、まして腹を満たす食料にさえ事欠いていた。今は、その心配はない。逸は、今は恵まれすぎて怖いくらいだとさえ思う。

青菜こそないものの、芋も有り、干した大根や芋がらもある。米も味噌も、水城家には充分にある。鳥や鶏卵などときどき届けに来る水城家の領民もある。そして主の新兵衛は、家臣の松尾夫妻、下働きである逸や、いねと留吉夫婦にも、それを分けることを惜しまない。先日などは、「手肌の皸あかぎれにも効くらしい」と言つて、ガマの油が入った小瓶を、逸の掌にそつと載せてくれた。

月々の給金はほぼ手付かずのままに、実家に送り届けることができている。かつて支度金として与えられた金とともに、それは故郷の両親たちが冬を越すには充分な助けになったことだろう。

新兵衛には手を合わせて額づきたいほどに感謝している。

逸が育ってきた寒村の代官屋敷の中にいたのは、懐の何かを取り落とすまいとするかのように、背を丸めて顎を引き、笑わない目と引きつった口元を貼り付けた者達ばかりだった。それは土地の一番の権力者である代官本人とその家族でさえそうだった。

彼らが逸を見る視線には、一片の優しきもなかった。そこにあるのは品定めをする態度だけだった。

思い出したくもないことを、一つだけ思い出した。

水城家に来るほんの少し前の日。

薪を集めて帰宅し、家の裏でその荷を下ろしていたときに、家の中から現れた代官の息子に、逸は不意に抱きすくめられ、体に触れられた。背後から伸びてきた手は、逸の顎を押さえて強引に振り向かせて眺め回した上、さらには懷に無造作に手を入れ、膨らみ始めた胸元を撫で回した。

いい具合じゃないか、と怯えた耳元に下卑た言葉を吹き込んだ。

「お前も器量が良いから随分稼げるだろうよ。生娘を高く売ったら、次は俺に買わせろよ」
楽しみだ、と言いつ残し、まるで薪のようにぞんざいに逸を突き放して立ち去った。

ほんの一瞬とやっていい出来事だったが、逸の体の震えが治まるまでには一刻ほどを要したものだ。そして、そのことを姉に打ち明け、近々、代官のところに、世話を頼みに行くつもりだと、話した。「私は稼げるだろうと、言われました。覚悟はもうできています。だから——」

父親に髪を切られ、水城家に来ることが決まったのは、そのすぐ後のことだった。

相変わらず髻を結うことはできないが、逸の髪も少しは伸びてきた。

勤めはじめた当初は、顎の長さにも満たなかったが、今は、ほんの少し顎より下まで毛先が届く。顔にかかるのが鬱陶しいので、頭に手ぬぐいを被って押さえていた。

そして逸は少し肥えてきたと思つた。まだまだ同じ年頃の娘に比べれば、体も薄く四肢も細い。それでも、以前よりは飢えることが少なくなったために、頬が柔らかく丸みを帯びてきていた。病の床にある用人の松尾夫人の和子にも、美しくなつた、と先日褒められた。

もう一つ。逸にとつては戸惑うばかりなのだが、胸が膨らんできていた。そのふくらみは、春を迎え、風が温もりを帯びるにつれ、目立ってきている。しかしその現象は、「いい具合じゃないか」と言つたあの代官の息子を連想させた。いやらしいことの象徴のように思えて気分が悪くなりそうだった。

そんな身体の変化を、新兵衛には悟られたくないと、逸は何故か思っている。

雪の降る国である。春は遅い。

それでも咲いた桜ももう散つて、青葉が眼に初々しい。

逸の髪もだいぶ伸び、白く細い首筋の上で、艶やかに揺らめくようになっていた。

葉の緑がひととき鮮やかになる頃、井戸から水を汲んでくると、額に汗を感じるほど温かになってきていた。

そばえ
日照雨

(成人向作品、18歳未満の購入・閲覧禁止)

著者 桜木春緒

春想亭 <http://shunsoutei.x.fc2.com/>

印刷製本 製本直送.com 様

<http://www.seichoku.com/>

画像素材 : <http://free-artworks.gatag.net/>

※無断転載は固くお断りいたします。